

朝倉彫塑館を訪れて

児玉 寛嗣

素人物書き仲間の企画した文学・芸術散歩がようやく実現の運びとなった。当日、終日雨とあいにくの天気だったが七人が参加。田端駅に集合したあと、田端文士会館を見学して室尾犀星、芥川龍之介などの居住跡地をまわり、日暮里に移動、朝倉彫塑館を見学した。私にとつてこの辺りは散歩コースのひとつである。前を通ることも多かつた朝倉彫塑館をはじめて訪問した。

彫刻家、朝倉文夫は大分から上京して東京美術学校（現・東京藝大）に入り、卒業後、この地にアトリエを構えて活動、朝倉彫塑館はアトリエ兼住居を一般公開したものである。アール・デコ調の黒色の建物は、朝倉自らの設計で昭和十年に完成した。その中心はアトリエで天井までの高さが八メートルもある広々としたスペースは「朝倉彫塑塾」と称して門弟を集めて育成を図る場所でもあつたとのことだ。

出世作の「墓守」や大隈重信、小村寿太郎の人物像などを堪能することが出来た。なかでも女性の裸体像はセンサーショナルな作品として注目され、官憲が展示に待ったをかけるなど物議を醸したそうだ。

上野駅の東北新幹線の改札に向かうコンコースに彼の手による女性の裸体像があつたのを記憶している。上野駅開業の年に生まれた朝倉が開業七十五周年を記念して製作したものである。それは「三相」と題したもので三人の若い女性が背中合わせで立っている姿で、それぞれの表情が「智・情・意」を意味しているそうだ。

大正時代なら人の行き交う駅のコンコースに女性の裸体像を置くなど考えられないことだっただろう。芸術作品として割り切っているのか、裸体に抵抗がなくなつたのか定かでないが、時代が変わつたということか。

人物像であるが、技術が進めば人物の立体写真をもとに三次元データを作成して、生成AIに「朝倉文夫の作風の像を作りたい」と入力すれば3Dプリンターを駆使して朝倉文夫作もどきの像が出来上がるかもしれない。それを芸術作品というかどうかは別であるが。